

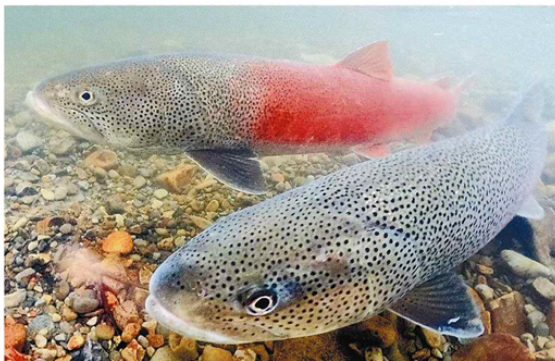


年 組 名前

道新 ワークシート

イトウ「聖域」風力59基

猿払川周辺1万8千畝



国内最大の生息地とされる猿払川水系の産卵場所で寄り添うイトウのペア（西野正史撮影、魚眼レンズ使用）

「幻の魚」と呼ばれる絶滅危惧種イトウの国内最大の生息地とされる猿払川水系（宗谷管内猿払村）周辺で、最大59基の風車を稼働させる風力発電の事業計画が浮上し、自然保護団体や関係者に生態系への影響を懸念する声が上がっている。国立環境研究所（国環研、茨城県つくば市）の専門家は「一帯はイトウに残された最後の聖域。計画は大量死のリスクを高める」と事業の中止を求めている。

「大量死のリスク」中止求める声

石油元売り子会社計画

計画は石油元売り大手ENEOS（エネオス）子会社のジャパン・リニューアブル・エナジー（JRE、東京）の「（仮称）宗谷丘陵南風力発電事業」。16日まで縦覧中の計画段階環境配慮書によると、猿払村と稚内市、同管内豊富町にまたがる約1万8千畝を事業想定区域とし、総出力最大

35万4千瓩、2027年春ごろの着工、32年秋ごろの運転開始を目指している。区域内に産卵床イトウは国内最大級の淡水魚で、国際自然保護連合（IUCN）は、野生で生息している中で最も絶滅の危険度が高い「CR（深刻な危機）」に分類している。

比較的安定した個体数が確認されているのは国内6河川の水系しかなく、猿払川水系や天塩川水系など4水系が道北に集中、いずれも上流域が想定区域にあたる。

国環研の福島路生・主幹研究員が1998年に猿払川水系で行った調査では311カ所の産卵床が確認され、118カ所が事業想定区域内。福島さんによると、

風車設置のため森林を伐採すれば、土壌の保水力が失われ河川の流量低下が起きやすくなるほか、降雨時には土砂が流入しやすくなるためイトウの大量死のリスクが高まる。イトウは上流で産卵するが、作業道の設置などが魚の遡上を妨げる恐れもあるという。

福島さんは「（開発は）絶対に行うべきではない」と主張。11日にJREに意見書を送付し、所属する環境生物多様性領域のホームページ（HP）でも事業が大きな脅威となることを解説している。日本自然保護協会（東京）も「生物多様性上、最大級の問題のある計画」として9月下旬、JREに中止を求める意見書を送付した。

黒松内でも予定

地元有志でつくる「猿払イトウの会」も事業の影響を不安視し、11日にJREに想定区域の見直しを求める意見書を送った。住民の1人は「再生可能エネルギーをすべて否定するわけではないが、イトウの成育に影響がないようにしてほしい」と訴える。

また、JREは「北限のブナ林」で知られる後志管内黒松内町でも最大18基の風車を稼働させる「（仮称）黒松内町風力発電事業」を計画し、24日まで計画段階環境配慮書を縦覧中。想定区域には町民団体「黒松内ブナ林再生プロジェクト」が植林したエリアもあり、同プロジェクトの忠鉢広喜会長は「実現性は薄そうだが、もし計画が進めば反対する」と語る。

JREは北海道新聞の取材に対し、再エネの普及が「地球温暖化防止のために急務」とした上で、「意見や専門的な調査を踏まえ、真摯に対応していく」（広報CSR部）としている。（大能伸信）



年 組 名前

道新で ワークシート

① 記事を読んで、要点をまとめてみましょう。

② この計画は、どうしていったらいいか、あなたの考えをまとめてみましょう。